

表4 クラブ評価 (1学期末)

	運動クラブ								文化クラブ								総計
	男			女			計	男			女			計			
	1年	2年	計	1年	2年	計		1年	2年	計	1年	2年	計				
A	45	41	86	17	20	37	123	14	21	35	11	16	27	62	185		
B	20	12	32	17	2	19	51	5	7	12	9	10	19	31	82		
C	2	2	4	1		1	5								5		
計	67	55	122	35	22	57	179	19	28	47	20	26	46	93	272		

IV. クラブ活動と進路指導

本校の全員クラブ参加も高2の3学期までで、3年生はクラブへの登録はしても、出席は自由になっている。これは高3になって特に学習への時間を十分とって落着いて勉強できるようにという配慮からである。

この点についての生徒の受取り方は表5のようであり、高2の3学期までクラブ活動に参加することは生徒の学校生活を充実させる意味からも重要であり、そのエネルギーを一転させて勉強に向けさせたいという意図からいっても現状でよいのではないかと考える。

表5 全員クラブ参加の期間

	運動クラブ										文化クラブ										総計
	男				女				計	男				女				計			
	1年	2年	3年	計	1年	2年	3年	計		1年	2年	3年	計	1年	2年	3年	計				
最初から自由参加	22	9	5	36	3	5	5	13	49	7	11	9	27	4	8	11	23	50	99		
高1の3学期まで	3	4	2	9	1	1	1	3	12	2	1	5	8	3		2	5	13	25		
高2の1学期まで	3	8	6	17	3	2	1	6	23		4	1	5	1		3	4	9	32		
高2の2学期まで	13	11	13	37	7	2	2	11	48	2	1	6	9	1	2	4	7	16	64		
現状どおり高2の3学期まで	20	17	17	54	18	11	12	41	95	5	7	13	25	9	9	6	24	49	144		
高3の1学期まで	5	5	8	18	3	1	4	8	26	3	4	2	9	1	6	3	10	19	45		
無 答	1	1		2					2					1	1		2	2	4		
計	67	55	51	173	35	22	25	82	255	19	28	36	83	20	26	29	75	158	413		

む す び

以上本校におけるクラブ活動の実態についての分析と検討を2, 3の点について試みたのであるが、これらの問題についてはまだまだ、いくつかの困難が内蔵さ

れている。これらの問題点のなかには現状において解決可能のものも少くない。そうした点を一つ一つ解決し、よりよいクラブ活動を作りあげてゆくことが、われわれの使命と考える。

(原田・加藤剛・北田)

第 15 報 積極性のある「道徳」をめざして

要旨 私達は過去三年間、発展的目標をもった生徒の管理指導の一環として、積極性をもった「道徳」を求めて実態調査を実践してきた。以下、そのまとめを報告してみよう。

I. はじめに

私達は、指導要領に於ける三領域に満足することなく、「与えられたから受ける」態度（昭和42年度道徳指導者講習会に於ける文部省側発言）から脱却する必

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

要があるのではないだろうか。私達は、身についた「道徳」、いただき物でない「道徳」、私達が必要と認める「道徳」を求めるべきであろう。

積極性が求められるのは、まず生徒であり、教師であるが、これに連なる家庭も今まではとかく見過ごされがちであったが、実際にはかなり重要な位置を持っていると考えられる。(昨年度紀要参照)

ところが一般の保護者は「道徳」を戦前の修身と比較しがちであり、修身の復活を望む声さえある。現代のような価値観の混乱した時に教師はどんな役を果たすべきかを考えることも大切なことであろう。

II. 生徒の態度

「道徳」の授業に対して、生徒は消極的ではないが多くの者が積極的になっているとも決して言えない。理屈の上では「道徳」は意義深いと考えているのに、授業の際には、それに相当するだけの興味を示していない。この点に教師側の反省すべきことが含まれているように思われる。ある著者は、「道徳とは倫理の人間化」とも言っているように、倫理が実践されることを意味している。「理想ばかり」が教えられたり、「日常生活に関係がない」ものが主なカリキュラムとなることはさけるべきであろう。「道徳」で学んだことを実践できるかどうかは先に述べたごとく大切な点であるが、大部分の生徒は不完全ながら実践できるとしている。しかし私達の目標とするところは、生徒が自己の判断の上に立って十分な実践をすることであり、頭ではわかっていても十分な実践が伴わないということがないようにせねばならない。これを解決することが積極性を増す大切な点である。

高校生に「道徳」の影響を受けた点をどの程度意識しているか調査したところ、「躰」が多い。しかし、日常、私達が生徒を観察しているところから考えて、その「躰」も十分とはいえない。実践の不完全さを度々感じるのである。

「道徳」は単に一教科として存在するのではなく、日常生活全般を含むものと考えられる。家庭生活と「道徳」は密接な関係を持つことが望ましいといえよう。ところで実際にはどうであろうか、学校で学んだ「道徳」を家庭に持ち帰っている者は中学生で半数、高校生に反省させると半数以下(1年34%, 2年19%)である。家庭に「道徳」を持ち帰る、換言すれば、生徒の家庭生活に「道徳」を滲透させることは、上に見た教からみて、教師が特別に考慮せずにおけば、向上の見込みがないであろう。この対策として東京のある小学校では、「道徳」に関する新聞を定期的に出しているということであるが、本校としては次項

で述べるような発展を試みてみた。

さて、高校2年生は「倫社」を学習中であるが、生徒は、「道徳」と「倫社」をどのようにとらえているのであろうか。又教師は、「倫社」を生徒が後に学習するという観点から「道徳」に対応すべきなのであろうか。生徒はこの二つを関連させて考えているようである。この点をどのように指導し、教師がどんな態度をもつか、今後検討しなくてはならない。

III. 積極性をめざして

先に述べた生徒の現状に即応し、さらに発展することを目指して次の試みをしてみた。

(1) 生徒の反省録

これは生徒全員に、時によって一部の生徒に実施するもので、「道徳」に対する関心を持たせ、討論形式の授業の際、直接意見を述べるができないものも参加できるようにと意図したものである。これは毎時間するのではなく、関連のある二・三時間を終えてから、担任の考えによって時期を選ぶのである。課題は概略すると、「授業内容のまとめ」、「印象に残った生徒或は教師の言葉」、「心に決めたこと」等である。

(2) 授業の録音

これは討論形式の授業の際にだれ気味になる生徒を引きしめるのに役立つ、表現をまとめて話す訓練にもなっている。又教師にとってもよい反省材料となる。

(3) 資料の準備

本校では「道徳」用副教材としての本を買わせていない。従って、じっくり考えさせたい場合はプリントを配布する。そして、配布された資料は家庭に持ち帰られる。生徒に、それらの資料を家の人に見せるようにという指示は全くしていないが約半数は見せている。これは「道徳」が家庭と関連するよい機会であろう。

(4) 授業記録の配布

現在、試験的に一クラスで行っているのであるが、ひとつの「道徳」の時間の既略と何らかの資料をプリントして家庭に持ち帰らせ、保護者の関心と意見を求めるのである。現在のところ、毎時間資料を作るだけの時間的余裕がないため、二、三時間に一回程度である。又、保護者の反応もだいたい良好と言える。

(5) 指導案の提出

生徒の積極性もさることながら、教師の積極性も大切であり、これはその為である。指導案といっても密案ではなく、略案である。提出の際は巾を持たせて、授業実施前でも、後でもよいことになっている。これ

は、単に教師の積極性を求める為だけではなく、後日、他の教師が、それを参考に用いる為でもある。

(6) 資料収集

新聞、書籍の切りぬき、複写を集め、いつでもエレクトロファックスにかけられるように整理している。又、録音テープを分類整理し、誰れでも何の手続きもなく利用できるようにしている。

IV. まとめ

私達は積極性を求め、その解決を家庭生活への「道徳」の滲透という点を重視して、進めてきた。しかし果して生徒個人への「道徳」の内面化にどれだけ効果があったか、「道徳」で学んだことをどこまで実践させえたか、又、家庭への「道徳」の滲透がどれだけかきたははまだ十分な自信が持てない。今後も継続して実践しなければならない。そればかりか、多くの問題点が私達の前に出てくるのである。例えば、資料の選択とその基準をどう決めるか、各教師の価値観の不一致、保護者の希望する「道徳」と教師の考える「道徳」の不一致をどう処理するか、真実を語る事が、現実的でないと考えるような生徒に社会をどのように見させるか。教師中心主義で生徒をどんどん引っ張っていく授業をしてよいものか、などである。

私達は積極的な「道徳」を目指して、やっとこれだけのことのできたに過ぎないが、今迄の問題解決にくらかでも役立ち、さらに新しく出てきた問題を意識できただけでも幸だと考えている。(盛田)

資料1

表1 「道徳」で学んだことを実践するのは大切だと思われましたか。

	1 年	2 年
大いに大切	19%	12%
大切	66%	64%
あまり大切でない	7%	17%
大切でない	3%	3%
無回答	5%	4%

表2 あなたは「道徳」を学んで何か養うことができましたか、

	1 年	2 年
はい	75%	45%
いいえ	19%	47%
無回答	6%	8%

表3 何を養うことができましたか

	1 年	2 年
巾広い思考力	43%	28%
日常生活の躰	46%	67%
その他	6%	3%
無回答	5%	2%

表4 「道徳」で学びあるいは実践したことを家の人と話しあい考えあったことがありますか。

	1 年 144		2 年 143	
	附中	外部	附中	外部
はい	19%	15%	12%	7%
いいえ	32%	35%	35%	44%
無回答	0	0	1%	1%

表5 「道徳」と今学んでいる「倫社」とはあなたの場合関連づけられていますか

	2 年
はい	35%
いいえ	22%
わからない	41%
無回答	2%

「道徳」と家庭(保護者へのアンケート・中2A)
表6 「道徳」と家庭の連絡について

ア かなり必要	24名
イ ある程度は必要	16
ウ 少しは必要	1
エ 必要ない	1

表7 「道徳」の家庭への滲透について現在は

ア. かなりある	8名
イ. てる程度はある	15
ウ. 少しはある	14
エ 全くない	3
無回答	2

将来は

ア. かなりあった方がよい	30名
イ. ある程度はあった方がよい	10
ウ. 少しはあった方がよい	2
エ. 全くなくてよい	0

資料2

「道徳」と倫社の関係について(高2A, B対象, 11月調査)

1. 関連づけられていると答えた者の場合、なぜ、又はどのように関連づけられていますか、道徳は倫理の上になり立ち、倫理を知ることによ

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

って道徳の認識ができる (6)
人間を正しく導くため (5)
どちらも社会の中で生活していく上に必要 (5)
道徳は倫社の一部 (倫社を具体的に示したのが道徳) (3)
社会秩序を守り正しい道を行うために道徳がある。道徳を身につける為に倫社がある (2)
倫社は普遍的、道徳は時代的なもので、道徳が倫社に近づく、
道徳は一般的常識をつくり、倫社は個人の考えをつくる
倫社は人生観をつくり、人生観を正しくする為に道徳が必要
道徳は常識的、倫社は道徳プラス知識を加えた思想
倫社は道徳を身につけるために学ぶ
道徳は倫社の学習の下準備
倫社は道徳をつきつめて考えたもの
倫社の思想の中には人間であり、人間を守るために道徳がある

2. 関連づけられていないと答えた者の場合

なぜ又はどんな点で関連づけられていないと思えますか。

倫社は人生観、社会観の手がかり、道徳は社会の規律として当然果すべきもの (5)
道徳は一つの考えに固定しており、倫社はいろいろな思想を学び、選択できる (3)
道徳は現実、倫社は理想 (2)
道徳は日常生活の中で、はだで感じとり、頭で理

解するものではない。

倫社は試験の点かせぎの記憶、道徳は社会を直接的にえる

3. わからない、無回答の者の場合

倫社と「道徳」の関係は現在どのように考えていますか。

道徳は倫社の一部、「道徳」は生活面での善悪、倫社は各人の思想 (5)
倫社は学問的で道徳の上にある (2)
道徳は模範的考えの教師の一方的な教えだが関連しているところもある
関連のあるところもある、道徳は身近のことについて考え、倫社は新しい知識を学ぶ (2)
道徳は社会習慣、倫社は道徳を考える思想 (2)
関連がある、身近かな問題にふれ、考え、成長させる。
社会生活で、倫社の勉強から、道徳によって秩序づけられる
両方とも社会生活に必要、全く別な内容も含む

道徳はしつけ、倫社は思想を学ぶ (2)
道徳は人生の基準、倫社は歴史上の思想家の考えを学ぶ (よくはわからない)
倫社は哲学、道徳は現実
倫社は思想の勉強
道徳は固定し、束縛する、倫社は選択 (2)
道徳は現在、役立つもの、倫社は古代思想
道徳は現在の世の中に通じるだけ、倫社は超時代的 (2)

第16報 保護者の期待と親子関係

<要旨>

本報告は昭和40年から42年までの継続研究の最終報告である。内容は、Ⅰ. 研究の目的と経過、Ⅱ. 保護者の期待 Ⅲ. 親子関係、Ⅳ. 結論からなっているが、本年度の研究を中心にまとめた。

Ⅰ. 研究の目的と経過

保護者が生徒に対してどのような期待をもっているかをおさえること、更に、そのような期待をもっている保護者と生徒がどのような親子関係をもっているかを確かめることは、学校で生徒を指導する際、重要な意味をもっている。集団的な意味からも、それはひとつの出発点となる。しかし、とりわけ、個人指導の際は、それをふまえることなしには、有効な指導とはな

りえないであろうといっても過言ではない。そのような観点から、次のような研究を行ってきた、

① 保護者の生徒に対する期待の調査

高校1年の生徒の保護者に対し昭和40年11月に次のような自由記述の調査を行なった。(その結果は、本校紀要第11集、B、第4報(P. P48-54)にくわしくかかげてある。)

① 御両親は高校生としてのお子様到现在どのようなことを期待しておられますか。なるべく具体的に箇条書きで1.2.3.……の番号を付して書いてください。

(a) 学習面について

(b) 生活面について

② 御両親はお子様の将来についてどのような